

ナチュラルキス+ 5

Keisabi e3 Sabo

風

fuu



C o n t e n t s

ナチュラルキス+ _{plus}	5
～ side Keishi ～	
えこひいきな神様	291

ナチュラルキス +_{plus} 5
～ side Keishi ～

1 ありのままの自分を

車を発進させながら、佐原啓史は自分の住むマンションにちらりと目を向けた。言葉にならない思いで、胸がいっぱいだった。

道路へ出る前に、啓史は助手席に座つている榎原沙帆子を見つめた。彼女は啓史の視線に気づかず、前を見ている。その横顔と、やわらかそうな唇に、自然と彼の口元が緩む。

結婚式を一週間後に控え、先ほど彼女の荷物が運び込まれた。

いつからだって、こいつは俺の部屋で暮らせるのだ。

もちろん、まだまだ安心していられないことはわかっているが……

啓史、気を引き締めるべきだぞ。気を緩めていたら、足元をすくわれかねない。心の声が注意を促してくれる。

結婚式を無事終えるまで……

あとたつた一週間……たつた一週間がこれほど長く感じられたことが、かつてあっただろうか。

無事結婚式を迎えるのは、確率的に五分五分というところだ。沙帆子の荷物が自分の部屋に運ばれたいまでも、それは変わりない。

式当日であつても、安心はできないのだ。招待客が教会に揃つていようと、披露宴の準備が整つていようと……沙帆子が結婚をやめたいと言つたら、そこですべてが終わる。

そうなつたら……彼女は両親とともに、父親の転勤先に引越してしまふに違いない。後ろ向きな思考に囚われている自分に気づき、啓史は顔をしかめた。

そんなことになつてたまるか。ようやくここまで来たのだ。何があるうと、俺は絶対にこいつを手に入れる。結婚が沙帆子次第であるのなら、彼女が結婚を取りやめたいと思つたりしないように、全力で努めるしかない。

啓史は気を取り直し、沙帆子に話しかけることにした。

「お前、美美子さんにコテンパンにやられたのか？」

啓史に問い合わせられ、沙帆子がこちらを向く。

沙帆子と沙帆子の母である美美子が、荷物の片づけをしている間、啓史は沙帆子の父である幸弘と買い物に行つた。いや、行つたというより、美美子によつて強引に行かされたと言つたほうが正しいのだが……結果的に、険悪な関係だった幸弘と打ち解けることができた。これは大きな収穫だつた。なにせ明日は、結婚式を挙げる教会で、両家の顔合わせなのだ。彼女の父親から敵視されたままだつたら、顔合わせは最悪なものになつ

ただろう。いまならば、少しは安心していいはずだ。
それはともかく、ふたりは荷物の片づけを早々に終らせ、自分たちが戻るまで、暇つぶしにテレビゲームをしていたらしいのだ。

「はい？」

沙帆子の返事に、啓史は眉を寄せた。なにやら怪訝けげんそうな響きが含まれていた。

「ゲーム。やつてたつて言つたろ？」

「どうして、わたしがコテンパンにやられたと思うんですかあ」

沙帆子はむつとしたように言い返す。

おかしなくらい反抗的だった。そして、それだけではなく……

得意げ？

沙帆子と美美子では、初めから勝負がついていると言つていい。

これまで、沙帆子と何度もゲームをしたが、正直言つて、彼女はよわっちい。

「だって、お前、弱いし。美美子さんはああいうの、無条件でうますうだからな」

前方を見ながら口にした啓史は、一瞬、沙帆子に目を向けた。

「ところがどっこいです。わたしの圧勝だつたんだから」

「圧勝？」思いもよらない返事に、面食らう。それはありえない。

「お前な。簡単にバレる嘘つくなつて」

まつたく信じられず、つい口走つてしまつたが、沙帆子が嘘をつくとも思えない。

「ほんとですつてば！」

「そう言われても……」

「信じられないな」

思わず本音を吐いてしまい、今度はどんな反応が返つてくるかと待ち構えたが、沙帆子は何も言つてこない。気になった啓史は、またちらりと沙帆子に視線を向け、眉をひそめた。

信じてもらえずにムツとしているものと思つたのに、笑みを浮かべていたのだ。

しかも、なにやら企んでいるような……

いつもの彼女らしくない沙帆子に戸惑う。

「先生、今度、対戦しましようよ」

は？

自信満々な口ぶりで勝負を持ちかけられ、啓史は呆氣あ。けにとられた。

「わたし、もしかして、勝つちゃうかも」

さらに付け加えられた発言に、言葉を失う。

こいつ、いったいどうしたってんだ？…………この強気な態度……まさか、ほんとに、美美子さんに勝つたつてのか？ まあ、圧勝というのは、さすがに言いすぎだろうが……

それでも、こんなに自信満々で俺に挑んでくるなんて……呆れて笑いたくなる。

こいつ、この間、俺に大負けしたことを忘れちまつたのか？

「ほんとか？ 怪しいもんだが……」

「美美子さんに勝ったというのは……信じられないが……たぶん本当なのだろう。けれど、それだけでこんなに自信満々というのは、どうなんだ？ まつたく単純すぎるな。この単純っぷり、笑えてならない。

「美美子さんに勝てたせいで、ずいぶん自信をつけたじゃないか」

愉快になつた啓史は、調子に乗つている沙帆子を煽るよう言つてやつた。

「それほどじゃないんですけどお」

口では謙遜しながらも、鼻高々な物言いには巨大な自信が感じられた。

もう笑えてならない。啓史は噴き出すのを必死に我慢した。

「まあ、十回に……一回くらいなら、もしかして勝てちゃうかもです」

勝ちを確信しての慢心^{まんしん}がビシバシ伝わってきて、啓史のいたぶり心をおおいに刺激しへくる。

こいつは、面白いことになつてきた。

「ふーん。それじゃ、今度やつて俺が一回でも負けたら、なんでもお前の言いなりになつてやろう」

もちろん負ける気などまつたくないから、その提案だが、沙帆子はその申し出に目を丸くする。

「いいんですか？ たつた一回だけでいいんですか？」

沙帆子は食いついてきた。一回くらいなら、なんてことなく勝てると思い込んでいるようだ。

こいつ……

指がうずうずしてならない。いますぐこいつの耳たぶを、思い切り引っ張つてやりてえ。込み上げてくる衝動を、啓史は抑え込んだ。

お楽しみはこれからだ。こいつが俺に勝てる可能性など、万にひとつもありはしない。「ああ。二言はない。一回でいい。だが、もしも一回も勝てなかつたら……」

真顔で言うつもりだったが、口元がにやつつのを隠せなかつた。その瞬間の自分の表情を、沙帆子は目にしたに違ひない。

「せ、先生？ か、勝てなかつたら？」

強気な態度は消え失せ、沙帆子はうわずつた声で言う。

ちょうど赤信号になり、車を停めた啓史は、たっぷり間を置いてから沙帆子のほうを見た。

「お前は俺の言いなりだ」

涙みをきかせた啓史の言葉に目を見開いた沙帆子は、そのあと怯えた様子で顔を引きつらせた。

少々脅しそぎたか？

先ほどまでの得意げな態度はどこへやら、自信も消え失せてしまったようだ。

せつかくこいつが楽しそうにしていたのに……

こいつがあんまり調子に乗っているものだから、つい……

こんなことじや駄目だな。やる気を失わせてしまったら、俺だつて面白くないってのに……

沙帆子をちらりと窺うと、彼女も啓史の様子を窺っていたらしく、ふたりの目が合う。だが、その瞬間、沙帆子は慌てて顔を背けた。

啓史は前方を見つめながら、顔をしかめた。

まずいな……。こんな調子じゃ、マジで嫌われちまうぞ。

おおいに不安が湧いてきて、啓史は猛反省した。

いたぶるのはもうやめよう。無闇に脅すのも……

ゲームも、これからは軽く手を抜いてやるか？

だが……自分自身を、沙帆子に合わせて偽るようで、気分が悪い。

沙帆子には、ありのままの自分を愛して欲しい。だが、それは、無理な望みなのだろう

うか？

信号待ちの間、沙帆子に話しかけようと思つたが、何を言つたらいいのかまるで思い浮かばない。沙帆子は啓史を恐れてか、助手席の窓に顔を向けてしまつていて、まったく表情が見えない。

チツ！

自分に腹が立つし、顔を逸らしている沙帆子にもいらつく。
話しかけられないでいるうちに信号が青に変わり、胃の辺りに違和感を感じながらも、アクセルをゆっくりと踏み込む。

お前、すでに嫌われちまつたんじゃないのか？　こんなやつと結婚なんてできないと思われたかもしれないぞ。

車内に漂う空気が重く濁んでいるように感じ、啓史は少し窓を開けた。

ひんやりした風が頬をかすめ、もんもんとしていた気分がいくらか回復する。

「明日……」

彼は何気なく口にし、沙帆子が自分のほうを見たのを目の端に捉え、更に言葉を継いだ。
「顔合わせは緊張するかもしれないが……お前、あそこのレストラン好きだろ？　楽しみか？」

沙帆子の返事を、息を凝らして待つ。

「は、はい」

焦つたような返事には嬉しそうな響きがあり、啓史は目を見開いた。

「また、あそこでランチ食べられるんですよね。た、楽しみです……すごく」

声量は控えめだったが、その言葉に偽りは感じられない。

胸の不安が、すーっと抜けていく。

啓史は止めていた息を吐き出した。

次の交差点を通過しながら、信号が赤ならよかつたのにと思う。

いますぐ沙帆子を見つめ、ほんのわずかでもいい……彼女に触れたかった。

2 困った性癖

ふたりは榎原家のアパートに戻ってきた。

沙帆子の手で、ガチャリと玄関のドアが開けられる。彼女のあとに啓史は続いた。シーンと静まり返った空間……目の前には、無防備に向けられている沙帆子の小さな背中……

「それじゃあ、勉強道具持つてくるので、先生、居間で待ってください」

無意識に彼女に手を伸ばしかけていた啓史は、その言葉で我に返り、腕を下ろした。沙帆子の手で、ガチャリと拳を握り、その欲望を追い払った。そして彼女の口にした言葉を頭の中で再生し、啓史は眉を寄せた。

「居間？ お前の部屋は？」

思わず問い合わせたが、「机がないから……」と答える沙帆子に、啓史は彼女の心の内を悟った。

「どうか……こいつの部屋は、いま……

荷物を持ち出したせいでガランてしまっているのだ……

ならばなおさら……。

「代わりになるテーブルとかないのか？」

沙帆子はちょっと顔をしかめ、「ありますけど」と、もじもじしながら答える。

「部屋にあるのか？」

「いいえ。そっちの部屋に……」

「持つてこい」

命令口調で言い、啓史は沙帆子の部屋のドアノブに手を伸ばす。

「居間のほうがよくなですか？」

焦った声が飛んできて、すっと振り返る。

沙帆子の表情を見て、啓史はどきりとした。落ち着きなく揺れる瞳……本人は無自覚らしいが、彼女は懇願するように両手を握り合わせている。

もちろんそれは予想していたこと……

ならばなおさら、自分のいる間に、ガラッと変わってしまった部屋に慣れさせておきたい。部屋にひとりきりになつても、動搖しないように……

「いや。お前の両親が戻つてきたら気が散る。途中から移動するくらいなら、はじめからこつちで勉強したほうがいいだろ」

啓史の意見に反論の余地がなかつたらしく、沙帆子は肩を落とす。

「まあ、そうですね」

しぶしぶ同意した沙帆子は、テーブルを取りにいった。

沙帆子を見送り、啓史は彼女の部屋に入った。

一步足を踏み入れ、言葉を失う。

沙帆子の部屋は見るも無残なほど変わり果てていた。

その変化は、啓史のマンションに彼女の荷物を運びこんだからであつて……自分にとつては嬉しいことなのに……大きな衝撃を受けている。

啓史は唇を噛み締めた。この俺ですら、こんなにうろたえているのだ。沙帆子は、そ

して美美子さんと幸弘さんは……：

自分が加害者であるような思いに囚われ、ひどく落ち着かない気分でいると、沙帆子が小さなテーブルを抱えて戻ってきた。

沙帆子からそれを受け取り、スペースだらけの床に置く。

「勉強するには、少し小さいな」

部屋の変わり様にはあえて触れずに言う。

「でも、これしかないから」

啓史は頷き、沙帆子に視線をやつた。

やはり、無理をして、なんでもなさそうに振る舞つてているようだ。

「まあ、置ききれないものは、床に置けばいいな」

「はい」

返事をした沙帆子は、「なんだか落ち着かなくて……」と呟く。

啓史は今こそ、沙帆子が抱えている物すべてを吐き出させる時だと思ったが、実行に移すことはできなかつた。

「まあ、だろうな」

そんな間の抜けた返事しかできない自分が情けなかつた。

刺激を与えて、本音を吐き出させるのが恐いのだ。

啓史が自分に苛立ちを感じている間に、沙帆子はテーブルの上に勉強道具を並べ終えた。

俺より、こいつのはうがしつかりしてゐるよな。面白くねえ。

「ほら、集中しろ！」

苛立ちに駆られるまま、啓史は沙帆子の頭を掴んで左右に振った。

「わかつてますよお」

沙帆子は不満そうに唇を突き出す。その表情を見て少し安心する。

「不服そうだな？」

「脅すように言うと、沙帆子は「そ、そんなことは、あ、ありませんよ」と慌てて言い、

鞄から筆箱を取り出した。そして、さも忙しそうにノートや教科書を開く。

そんな彼女の様子に、啓史もカテキヨーモードに気持ちを切り替えた。

「せ、先生、も、もう駄目ですう。これ以上詰め込もうとしたって、詰め込む隙間なんて、もうありませんからあ」

沙帆子は反抗心を示すように、テーブルに突っ伏した。

彼女の背後に立ち、テーブルに手をつきながら勉強を見てやつていた啓史は、くすつと笑い、身を起こした。

「それじゃ、休憩するか」

時間を確かめると、勉強を開始してからすでに一時間経過している。
……こいつ頑張ったな。

「きゅ、休憩ですか？」

沙帆子が嬉しそうに声を上げる。

その様子に苦笑しながら、啓史は「ああ」と返事をし、自分の鞄に歩み寄った。自分の仕事のほうもやつておかなければならぬ。

明日は両家の顔合わせがあるからな……

明日のことを思い、啓史は顔をしかめた。どんなに嫌でも避けては通れない。

「そ、それじゃあ、何か飲み物とか用意してきます。先生、コーヒーでいいですか？」

啓史は沙帆子に顔を向けた。

「コーヒーか……」

「うん。もらおうかな。いつもより、少し苦めにしてくれ」「了解しましたあ」

可愛らしく頭を下げ、沙帆子は跳ねるように部屋を出ていった。

そんな彼女の様子に、いつたん微笑ましい気持ちになつたが、やはり不安は募る。

明日のことを考へると、どうしても胸中穏やかではいられない。

それでも、本当に、徹兄や順平までもついてくるつもりなのだろうか？

鞄からパソコンを取り出し、ベッドの上に置いたが、まったく仕事をする気になれない。

親父は、結婚を認めてくれているが、それも沙帆子次第。彼女に結婚の意志がないと

思えば、取りやめろと言うだろう。幸弘さんだつて、友好的にはなつてくれたが、いま

だつて結婚話など消えればいいと望んでいるのだ。……徹兄も同じだろう。

明日の顔合わせは、簡単には乗り越えられるものではないと、覚悟しておいたほうがいい。

両親たちは、目の前のことばかりではなく、ずっと先の未来にまで目を向けている。

さらに父は、沙帆子の気持ちがまだ固まつていないと感じ取っている。

明日、父は沙帆子の気持ちがどれほどのか確かめるだろう。

苛立ちに駆られた啓史は、ぐつと拳を固め、奥歯を噛み締めた。

沙帆子の返答によつては……

結婚を取りやめさせるに違いない。俺がどんなに抗つても無駄だろう。

だがそれは、沙帆子のためというより……俺のため……

胸がむかついて、吐き気がする。

くそつ！

無事結婚できる確率は五分五分どころではなく、もっと低いのかもしれない。

落ち込んだ啓史は、ベッドの上のパソコンをどかすと、ごろんと寝そべつて天井を見据えた。

結婚など、本当にできるんだろうか？

沙帆子が自分の側にいるときだけは可能性を感じられるが、ひとりでいると……

「ああ／＼あ」

天井を見上げたまま疲れた声を上げた啓史は、知らぬ間に目を閉じ、眠りの中へと引き込まれていった。

ふつと意識を取り戻した啓史は、パチパチと瞬きを繰り返した。

な、なんだ？　俺、寝てた……のか？

上半身を起こして片肘をつき、眠気を払つていた啓史はぎよつとした。

なんと自分の隣で、沙帆子が眠りこけている。

コーヒーを淹れに行つたはずなのに、なんでこいつここで寝てる？

「おい、なんで寝てんだ？」

啓史は気持ちよさそうに寝息を立てている沙帆子に声をかけた。

沙帆子の瞼がピクピクと動き、薄く目が開いた。

「は……はい？」

返事をして、啓史を見つめ、目をパチクリさせる。

「あれっ！ 先生、起きたんですか？」

沙帆子は慌てて身を起こす。

啓史は呆れた。試験勉強しなきやならないつてのに……

「お前な、寝てる場合じゃないぞ」

思わず叱るように言うと、沙帆子は気まずそうに顔をしかめる。

「だつて、先生が寝ちゃってたから……」

俺が寝てたから、自分も寝たってのか？

「起こせよ」

「起こせませんよ。先生、とっても疲れてたみたいだもん」

「だからって、試験勉強をしなきやならないお前まで寝てどうするんだ？」

「そ、それはまあ」

顔を赤らめてもじもじする。その様子に、いたずら心が刺激された啓史は、沙帆子の動きを封じるように彼女の両脇に手をつき、自分の顔を近づけた。

突然の行動に、沙帆子が目を見開く。

「起こせよ」

「せ、先生？」

慌てつぱりがなんとも可愛い。こんな顔をされると、ますます苛めたくなる。

「襲つてくれてよかつたのに」

啓史は甘い口調で言つた。

からかうだけなら、こんな言葉もすんなり出てくる自分がおかしい。

「は、はい？」

予想したとおりの反応に堪え切れず、啓史は噴き出した。

だが沙帆子の機嫌を損ねてしまつたようだ。

このむとした顔も、なんとも言えず……

啓史は思わず沙帆子の唇に自分の唇を重ねた。

甘い……意識がとろけそうなほど……

彼女のすべては自分のもの、とこの瞬間だけは実感できる。

啓史は沙帆子の身体に触れ、その感触を味わいながら、手のひらを下へと滑らせた。

服の下に手を忍び込ませ、やわらかな肌に直接触れる。沙帆子がびくりと反応し、啓

甘く、我を忘れるような沙帆子の身体に夢中になっていた啓史は、玄関の呼び鈴を耳にし、ようやく手を止めた。

「たぶん、沙帆子の両親だろう。

「帰ってきたみたいだ」

「ただいまー」

沙帆子の明るい声が近くで聞こえた。まだ身なりが乱れている沙帆子は、ひどく驚いて飛び上がった。

「沙帆子」

パニックを起こしている沙帆子を落ち着かせようと、啓史はなだめるように声をかけ、急いでドアノブに手をかけた。取り乱している彼女をそのまま置いていきたくなかったが、どちらかが部屋から出てこなければ、不審に思われるだろう。

部屋を出ると美美子がいた。幸弘はまだ外にいるのか、玄関先にも姿はない。

「おかえりなさい」

「啓史君、買っちゃつたわ」

弾むように美美子が言う。

「何を?」

手にしている紙袋を見て、啓史は見当をつけた。

「あ、ああ……買つたんですか?」

美美子は大きく頷いた。

「もちよ」

啓史の家にあるゲーム機と同じものだ。

沙帆子に負けたのが、よほど悔しかつたと見える。

そのとき、山のよう荷物を抱えた幸弘が玄関に入ってきた。啓史と目が合つたが、ふいつと、つまらなそうに視線を逸らす。

「どう、勉強の進み具合?」

美美子の問いに、啓史は「ええ、みつちりやりました」と真顔で答えた。

ふたりとも寝てしまつたうえに……口には出せない行為にまで及んでしまつたなんて、報告できるわけがない。

彼の返事を聞いた美美子は、「ええ、満足そうに頷いた。

それならばゲームができると思つたらしい。

「それじゃ、まだ時間あるし、少しこれやんない?」

美美子の誘いを受けて啓史は迷つた。

部屋に置いてきた沙帆子が気がかりだ。いまだに出てこないところを見ると、先ほど

のことがまだ尾を引いているのかもしれない。

「幸弘さんとやつていてくださいますか。もう少しやつておきたいので
「わかつたわ。幸弘さん、テレビに繋いでちょうどだい」

あつさりと頷いた美美子は、幸弘に声をかけながら居間に向かう。

「美美子ちゃん、繫いだら、まず僕に練習させてくれよ。僕だけまだ触ったこともない
んだからさ」

「いいわよ。でも、わたしもやるわよ。このコントローラーはわたしだって初心者なん
だもの。沙帆子なんか負けてる自分が情けなくてなんないんだから」

居間に向かつていくふたりを見送り、啓史は沙帆子の部屋に戻つた。

「ママつたら。ゲーム機買つてきたんですね」

啓史が入つた途端、沙帆子は呆れたように言う。

「ああ。よほど悔しかつたんだろうな」

そう口にしながらほつとする。いつもの彼女に戻つている。

俺との親密な行為に、こいつも少しは慣れてきたつてことか……いい傾向だ。

「わたしに負けて？」

満足そうな口ぶりに、笑いが込み上げてくる。

「そういうことだな」

嬉しそうに顔をほころばせる沙帆子に見入る。すると、啓史に見つめられた沙帆子は
恥ずかしそうに頬を染めて俯いた。

こんな顔をされたら、また触れたくなる……思い切り抱きしめたくなる。

「勉強は、けりがついてるのか？」

気持ちを切り替え、啓史は尋ねた。

「も、もう少し……です」

「それが終わつたら、休憩しよう。ゲーム、思いのほか早く、勝負できそつだな」
さつさと勝敗をつけ、早いところ、言いなりの権利を手に入れたい。

何をやらせようか？ 甘くいたぶるなんていいな。なんにしても、楽しみだ。

啓史の表情に何か読み取つたらしく、身を竦ませた沙帆子がごくりと喉を鳴らす。

怯えたような沙帆子の様子に、征服欲が刺激される。

「せ、先生？」

「ああ？ なんだ？」

啓史は機嫌よく答えた。

「あ、のことですけど……つ、つまり……言いなりになるとかつて……」

勝負はなしにしてくれとでも言うつもりなのか？

啓史がにやりと笑つてみせると、沙帆子はびくりと身じろいだ。

いまさら、なしにしたいだなんて、誰が許すか。

「勝負に賞品がついてると、燃えるな」

わざとそう言つてやると、沙帆子の頬がひくつく。

もう逃げられないと悟つたらしい。

がつくりと肩を落とす彼女を見て、啓史は愉快でならなかつた。

3 奇跡の再認識

ノックが聞こえた途端、美美子がドアを開けて顔を覗かせた。

「ねえ、まだなのお？」

なかなか来ない彼らに、痺れを切らしたようだ。だが、苛立つている様子はない。

たぶん、さつそく幸弘と勝負をし、美美子は圧勝したのだろう。

幸弘さん、わざと負けてやつたんだな。

あのなんでも器用にこなす幸弘が、テレビゲームは苦手だなんてとても思えない。

帆子を賭けたエアホッケーの勝負で真剣に挑んだ自分を負かしたくらいだ。

つまり、妻をコテンパンにして楽しむ趣味は幸弘にはないということなんだろう。

沙帆子をコテンパンに打ちのめして楽しんだ自分と比べてしまい、なんとも言えない気分にさせられる。

美美子さんの喜ぶ顔を見たいんだろうな。

……俺だって、言いなりさえ賭けていなければ……負けて……いや、言いなりがなくとも……いたぶって樂しがるな。実際これまでもそうだったわけで……

「わ、わたし、勉強しないと……」

沙帆子を見ると、目が落ち着きなく宙を泳いでいる。

まあ、この反応は当然か。このつの勝ちは、万にひとつもない。

この俺に勝負を挑んできたこと自体、愚かとしか言いようがないのだ。

十回の勝負で一度も勝てなければ、沙帆子は啓史の言いなりにならねばならない。

「休憩は適度に取るほうが効率がいい。ほら、行くぞ」

沙帆子の腕を掴んで引つ張つたが、沙帆子は身を強張らせて抵抗する。

啓史はにやりと笑つた。

こいつ、面白いじゃないか……

「い、いえ。ぜんぜん疲れてませんから。先生、どうぞ遊んできてください。わたしひとりで勉強します」

わざとらしい口調に、啓史は笑いを堪えた。

「あら。ずいぶん張り切つてるじゃないの」

張り切つて、か……。

芙美子の言葉に噴き出しそうになつた啓史は、ふたりからさつと顔を逸らし、笑いを噛み殺した。

「さしてーはあ」

「ママ、なあに?」

「啓史君つたら、沙帆子が成績ちょっとびりでも上げたら、ご褒美あげるとかつて言つたんでしょ?」

ご褒美ね。

「まあ、そんなところです」

沙帆子は、まるで違うと言いたいだろうが……

啓史は沙帆子の頭の上に手を置いた。

「わ、わた……」

「芙美子さんとの勝負で、ずいぶん腕を上げたって『言うんですよ』

何気なく口にしてしまつたが、どうやら芙美子を刺激してしまつたようだ。

芙美子の表情は、これまで見たことがないほど険しくなつた。

「め、め、めつそうもないですっつ!」

母親の表情の変化に怯えた沙帆子は、必死に手を横に振る。

むろん、そんなことでは芙美子の闘争心は収まらない。

「沙帆子、いらっしゃい! やるわよ!」

芙美子から噛み付くように言われた沙帆子はさらに震え上がる。芙美子を刺激してしまつた当人としては、少々気まずい。

「で、でも、べ、勉強お……」

抵抗しても無駄なのにな……さつさと勝負をすればいいのだ。

ふたりのどちらが勝つか、興味もある。

啓史は沙帆子の両脇に手を差し込み、その身体をひょいと持ち上げた。

「せ、先生、な、な、何をするんですかあ

沙帆子は身体を捩つて啓史から逃れようとする。

「もちろん、勉強の息抜きさ

「そうよ。勉強には息抜きが必要よね」

「い、いらない、いらないからつ。息抜き必要ないからあつ」

抵抗を続ける沙帆子に手こぎりつも、啓史はなんとか彼女を部屋から連れ出した。

た。総当たりならば、必ず啓史と幸弘が対戦できると睨んでのことに違いない。

最初の対戦は沙帆子と幸弘がすることになり、接戦の末、沙帆子が勝った。

沙帆子は自分の力で勝ったと思いこんでいる。だが、そうではない。コントローラーを握りしめて必死に画面を見つめていた沙帆子は気づかなかつただろうが、幸弘はうまい具合にコントロールして、娘に勝ちを譲つたのだ。

驚いたことに、美美子は、幸弘がわざと負けてやつたとわかっているようだ。そして自分もまた、夫に勝たせてもらつてゐるということを認識しているらしい。

これがふたりの暗黙の了解なのだろう。なのに、娘の沙帆子はまるで気づいていない。けれど、そこに幸弘と美美子の、かけがえのない娘への深い愛情を感じる。

こいつ、ほんと、愛されてるよな……

沙帆子に目を向けた啓史は、彼女の表情を見て眉を上げた。

父親に勝つて単純に嬉しがると思ったのに、沈んだ顔で何か考え込んでいる。

もしや、負けてもらったことに気づいたのか？

そうは思えないのだが……

沙帆子の様子が気になつたものの、次は啓史と美美子との勝負だ。

コントローラーを掴んだ啓史は、幸弘の視線を感じてさりげなく振り向いた。

鋭い視線が語るのは……

どうやら、適度に手を抜けとのことらしい。

素直に従いたくはないが……まあそうして欲しいのであればそうしてやろうと、啓史は軽く手を抜くことにした。

勝負が決まる直前まで、勝とうか負けようか迷つたが、彼の隣に座つている沙帆子の一生懸命な応援が気分良く、啓史は結局勝ちを取つた。

幸弘は啓史が勝つたことに対して、別段、文句はなかつたようだ。

「もおお、もう少しつてどこだつたのにい」

負けたものの、美美子の声には満ち足りた明るさがあった。

確かに、いい勝負だつたと言えるかもしれない。

「それじゃ、僕と美美子ちゃんとはすでに勝負がついてるし、次は沙帆子と美美子ちゃんかな」

「おっしゃーつ!!

美美子の気合は、凄まじかつた。

当然だろう。沙帆子との勝負のために、このゲーム機を買つてきたのだから。

沙帆子のほうは、母親の気迫に氣圧けおされている。

こうなると、啓史としては、なんとしてでも沙帆子に勝たせてやりたくなる。

「沙帆子、応援してやるから、頑張れよ」

啓史は沙帆子の肩を叩き、檄けいを飛ばした。だが、沙帆子の反応はイマイチだ。どうも自分の負けは決まっていると思っているようだ。だが、いざゲームを始めてみると、結果は明らか。沙帆子の負けはなかった。

「あーん。負けたあ」

「おしかつたよ。 芙美子ちゃん」

「そうよね。らしくなく、沙帆子ってば、このゲームに限って、うますぎるんだもん」母の言葉に、少しばかりむつとしたようだが、沙帆子は晴れ晴れとした笑みを浮かべた。どうやら、完璧になくしていた自信を、いまの勝負で取り戻したらしい。

なんだかな……純粹というか……単純というか……

「それじゃ、お次の勝負は沙帆子と啓史君だな」

「えっ？ パ、パパと佐原先生は？」

いくら芙美子に圧勝し、自信を取り戻せたといつても、啓史と勝負はしたくないらしい。「最後でいい」

笑いそうになるのを堪こらえながら、啓史は言った。

ついに、言いなりを賭けた勝負の一回目だ。

表情を硬くした沙帆子は、真剣な顔でコントローラーをぐつと握り締めた。

そんなに力を入れては、勝てるものも勝てないので……

「あーあ」
娘めのわを憐あわれるような声を上げた幸弘は、責めるような視線を啓史に向けてきたが、初めから手を抜くつもりなどなかつた。

賭けがかかった勝負なのに、いい加減にやつては、真剣に挑んできている沙帆子に対して失礼だ。

「沙帆子つてば、ぜーんぜん、いいとこなしじゃないのお」

芙美子は不服そうだ。自分に勝つた沙帆子が、こうも簡単にやり込められては、面白くないのだろう。

「沙帆子」

啓史の呼びかけに、沙帆子はぎょっとしたように身体を跳ねさせ、彼の顔を見上げた。

「今回は俺が勝ちをもらつたが……十回に一回は……勝てるんじゃないか？ なあ？」

沙帆子が口にした言葉を当て付けのようにそのまま言つてやると、沙帆子は頬をひくつかせた。

「いまの勝負の有様じや、そんなことぜーつたいにありそつにないわね」

「ま、まだ、わかんないもん！」

母親の言葉を打ち消すように沙帆子は叫んだが、負け犬の遠吠えにしか聞こえない。

「それじゃあ、最後は幸弘さんと啓史君ね」

「ああ。啓史君、お手柔らかに頼むよ」

「こちらこそ」

幸弘は、エアホッケーに続いて、何がなんでも勝ちを取りに行くつもりのようだ。

「美美子ちゃん、そろそろ夕食の支度をしなけりやならないだろ？」

コントローラーを手にしながら、幸弘はさりげなく妻に言い、含みのある視線を啓史に投げかけた。それに対しても、啓史も視線だけで幸弘に応じた。もちろん幸弘の言いたいことはわかる。

幸弘は、啓史との勝負を、美美子にも沙帆子にも見せたくないのだ。

「あら、もうこんな時間なのね」

美美子がそう言いながら立ち上がったのを見て、啓史は沙帆子に声をかけた。

「沙帆子、息抜きはもういいだろ。先に部屋に戻つて勉強してくれ。俺も、幸弘さんとの勝負がついたら行くから」

「はーい」

自分たちの勝負を見たいとこねるかと思ったが、沙帆子は素直に返事をし、自分の部屋に戻つた。

ふたりきりになつたところで、幸弘が話しかけてきた。

「沙帆子にどうして手を抜いてやらなかつた?」

「そんなことをしては、彼女が喜ばないとわかるからですよ」

「ふん。だが、あれほど完璧にやり込められると、このゲームそのものに興味を失くす。そうなるとつまらないぞ」

幸弘の指摘に啓史は眉を寄せた。
確かにそれは一理ある。

幸弘さんもそれを懸念して、うまいこと勝負をコントロールしているわけか？
その思慮深さに、啓史の中の幸弘のイメージがまた大きく変化する。

このひとは奥が深い。知れば知るほど驚かされることばかりだ。

もちろん、言いなりを賭けた勝負は、最後まで強制的に進めるつもりだが……まったくやる気のない沙帆子と勝負しての勝ちでは、面白くない。

「おっしゃるとおりですね」

「うまく負けるつてのも、技がいる。それを使いこなすのも楽しいもんだぞ」
啓史は幸弘に真顔で頷き、それからにやりと笑つた。

「俺に対する技術は必要ありませんから。幸弘さん、遠慮なく本領發揮してください」

「ふん。言われなくてもそうするさ」

売り言葉に買い言葉の末、エアホッケーに続く幸弘との勝負が幕を切って落とされた。

勝負を終え、沙帆子の部屋に行くと、テーブルに頬杖をついていた彼女がすぐに振り返ってきた。

「どうでした？」

結果はわかりきつているが、というような顔で聞いてくる。

自分とどっこいどっこいの技術しかもつていらない父親が、俺に勝てるわけがないと思っているのだろう。

「引き分け」

啓史の返事に、沙帆子はぽかんとする。

「はい？」

意味が理解できないらしい沙帆子に、啓史はもう一度「引き分けてきた」と繰り返した。沙帆子はパチパチと瞬きし、困惑顔をする。

「先生、パパに……あのパパに、勝てなかつたんですか？　ど、どうして？」

「強いからに決まってるだろ」

思わずそう言つてから、しまつたと思った。

「強いて、先生がですよね？」

啓史は悩みながらも「幸弘さんだ」と答える。

沙帆子はさらに困惑が増したようだつた。

「だって、でも……パパ、わたしとママに負けて……先生、わたしとママに勝つてて……」沙帆子は、幸弘が手を抜いているとは夢にも思わないらしい。もちろん、真実をバラしてはまずい。啓史はさりげなく話題を変えることにした。

「そんなことより、勉強するぞ。それとお前……」

「な、なんですか？」

「勝負一回目の結果は、お前の負けだぞ。言いなりを賭けての勝負は、残り九回だからな」

沙帆子の表情は、ずいぶんと冴えない。

幸弘さんが言つていたとおり、俺が本気でやりすぎたために、こいつのやる気を削いでしまったか。まずいな……

「残りの勝負、いつやる？」

返事をしようとしている沙帆子に、啓史は再び声をかけた。

沙帆子は知らんぷりして教科書をめくついている。

「おい。何、無視してんだよ」

「べ、別に無視してなんか……勉強に集中してたんですよ」

小憎らしい物言いをしてくる沙帆子に、啓史のいたぶり、心が激しく刺激される。

「ほお。そのわりには、ちゃんと返事してるじゃないか」

「そ、それは先生がうるさい……」

「うるさい?」

啓史の尖った声に、沙帆子はハツとしたように振り返ってきた。

「この俺が……」そう言つて顔を寄せ、「うるさいって?」ともつたいつけて聞く。

怯えた沙帆子は、泡を食つて後ずさつた。

もちろん、啓史の手から逃れられるはずもなく、沙帆子は彼のいたぶりの餌食になつた。

榎原家からの帰り、啓史は運転しつつ、今日の自分を反省した。

沙帆子をいたぶるのはなるべく自粛しようと想えていたのに……

しかも勝負への意欲を失くさせてしまつたし、こんな調子では、結婚の意志までも、自分のせいに失わせることになりかねない。

そうならないようにしなければ……

これから勝負……どうするかな?

いつも手を抜いて、あいつを勝たせて喜ばせてやるか?

だがなあ……賭けをしての勝負だってのに、わざと負けるつてのは……たとえ沙帆子が喜んだにしろ、後味がよくなさそうだ。

啓史は大きなため息をついた。

明日のことを思うと、不安ばかりが湧き起こつてくる。

どんな明日が、自分を待ち受けているのだろう?

4 むかつぎの消化

宗徳の運転する車についていきながら、啓史はなんとも落ち着かない気分を味わつていた。

今日の父の言動、そして決断が気がかりで仕方ない。

何もかもが終わつて、教会をあとにするときの自分は……俺はどんな現実に、この身を置いているのだろうか?

考えても仕方のないことなのに……

「馬鹿か！」

思わず声を荒らげてしまつた啓史は、父親の車に鋭い視線を向けている自分に気づき、顔を垂めた。そして、気を取り直そうと周囲に目を配つた。

初めて通る道だ。彼は前回同様に、教会側の駐車場に向かうつもりだったのだが、両親たちはこの辺りを調べたようで、レストラン側の駐車場に向かうことになつたのだ。

それで道案内の必要はなくなつた。

啓史は後ろについてくる徹の車を、バツクミラーでちらりと見た。

あのふたり、当然のようについてくるとは……

徹兄はまだしも、順平は来なくてよかつたと思うのだが。

妙にテンションが高い順平に、むかついてならない。

あの野郎……兄が置かれている危うい立場も知らず……

できることなら、奴の首を絞め上げてやりたい。だが結局のところ、順平よりも、こんなにも追い詰められた気分でいる自分に、一番腹が立つ。早送りボタンを押して、ここで過ぎざなければならぬ時間ささと進めてしまいたいほどだ。

自分がひどく身体を強張らせていることに気づいた啓史は、大きく息を吐き出して肩の力を抜いた。

いつの間にか、目的の場所が見えてきていた。

彼は目に見えぬ大いなる力に祈りながら、駐車場に入つていった。

車から降りた啓史は、駐車場を見回した。もしかしたら、榎原家の三人がこちら側に来ているのではないかと思つたが、幸弘の車は見当たらない。やつぱり、教会側にやつてくるんだろう。

「いいとこだね」

まるで観光地にでも来たかのように、順平ははしゃいでいる。

啓史は少し小高いところにあるレストランを見上げ、もちろんここからでは見えないが、教会の方向へ視線をやつた。

「啓史さん、どこに教会があるの？」

少し離れた場所にいる母に、啓史は指を差して答えた。

「あっちの方角」

「なら、早く行きましょうよ」

皆に号令をかけるように言い、久美子はいそいそと坂を上つていく。順平はそのあと

を追つて駆け出し、あつという間に母を追い越した。

「元気な奴だな」

苦笑しながら父が言うと、徹も笑いながら坂を上り始めた。

「啓史」

自分も皆に続こうとした啓史は、父の呼びかけに足を止めた。

「何?」

聞き返したが、父は何も言わず、啓史の肩を叩いたつきり、そのまま歩き始める。

啓史は父親の背中を睨むように見つめたあと、それに続いた。

「何か言いたいんじゃないの?」

父と肩を並べながら問う。

「いや……そうなんだが……言葉が見つからん」

「なんだよ、それ」

「そうふてくされるな」

「ふてくされてなんか……」

「啓史」

「何?」

啓史は反抗的な眼差しで父を見つめた。

「気持ちはお前と同じだ。たとえお前の意向に沿えないとしても……な」

父の言いたいことがわかり、イライラは募るばかりだ。啓史は口を固く引き結んだ。
そうしていいないと、『父さんに何も期待しちゃいない』などと怒鳴りたくなる。いや、
それだけならまだいい。『そんなこと言わずに俺の味方になつてくれ』なんて、あとになつ
て悔やみそうな情けない言葉がいまにも口から飛び出そうだ。

「早く、早く、もうみんな遅いよお」

レストラン脇の道を歩いていると、順平が足踏みしながら大声で声をかけてきた。
母と順平は、すでに坂を上りきり、『愛の館』の前にいる。なんとも恥ずかしい名前
の建物だが……先週、教会の下見でやつて来たとき、彼らはここでランチを食べ、打ち
合わせをした。

「なんか、とつてもおしゃれな建物だけど……啓史さん、ここはなんなの?」

聞かれたくなかった久美子の問いに、思わず顔が歪む。

順平同様の母のはしゃぎっぷりに、啓史の隣を歩く父も笑いを堪えている。

「……そこも、レストランらしいけど」

適当に返事をする。『愛の館』なんてふざけた名前、口が裂けても言いたくない。
「まあ、レストランがふたつもあるの? 面白いわね。でも……ここ、パンフレット
に載っていたかしら?」

首を捻つている母に、「道楽で建てたんだってさ」と、いい加減に答える。

「道楽？ それってどういう意味？」

問い合わせられて、啓史は返事に詰まつた。

「なんか、特別な時に使うとかって、話だつたけど……」

「特別な？」

そう呟いた母はハツとし、急いでバッグを開け、こここのパンフレットを取り出した。

そして熱心に、パンフレットと目の前の館を見比べる。

「あらあ、これだわ！ パンフレットに載つてゐる写真は周りにお花がいっぱいあるから、ちょっと印象が違つて見えたのねえ」

感激したように言い、久美子は啓史に大きな笑みを向けてきた。

嫌な予感がした瞬間、母が叫んだ。

「『愛の館』よ！」

徹が噴き出し、啓史を振り返る。

「『愛の館』か。ずいぶんなもんがある場所、お前、選んだもんだな、啓史？」

徹のからかいにムツとした啓史は、兄を睨みつけた。

「俺が選んだわけじゃない」

「だが、嫌なら反対できたり？」

反対などできるか！ 結婚させてもらえるなら式場などどこだつていい。自分の選択権など端から放棄している。

チツ！

胸の内で舌打ちし、啓史は彼らを置いてさつさと先に進んだ。もうそろそろ約束の時間になるし、榎原家の三人もやつてくるはずだ。いや、すでに到着しているかもしれない。できれば三人を出迎えたいと思つていた啓史は、足を早めた。

教会に着いた啓史は、前回、車を停めた駐車場を見渡した。だが、榎原家の車は見当たらない。

まだなのかな……？ 遅れるとの連絡はないから、約束の時間通りやつて来るはずなのだが……

眉を寄せた啓史は、いま自分が来た道を振り返つた。

両親も兄弟もやつてこない。苛立ちながら待つが、依然としてやつてくる気配はない。みんな、なにやつてんだ？

なんなんだ、いつたい？ 教会の前で、ひとり突つ立つてゐるという状況に苛立ちが増す。

様子を見に行こうと引き返したところで、両親と順平が楽しそうに話しながらやつてきた。

「なにやつてたんだよ。そろそろ榎原さんたちが到着するつていうのに……」

「うん？　まだいらしていいのか？」

「あ、ああ。もうそろそろ来ると思うんだけど……」

約束した時間はすでに数分過ぎていた。榎原家の三人が遅れているということに、なぜか啓史が気まずくなる。

「んまあっ、素敵じゃないの」

教会の真正面に立った久美子は、満面の笑みで建物全体を眺めている。

「ここで結婚式を挙げるなんて、夢みたい」

その言葉に、啓史の横に並んでいる宗徳がおかしそうに笑う。

「そんな言い方。まるで母さんが結婚式挙げるみたいに聞こえるよお」

くすくす笑いながら、順平は母をからかう。

「いやーねー、順ちゃんってば、母さんそんなつもりじゃ……啓史さん、の方達？」

啓史はハツとし、母の視線の先を見た。

幸弘と美美子が小道を歩いてくる。

なんだ、彼らもレストラン側の駐車場から来たのか。

啓史はふたりに駆け寄った。

「幸弘さん、美美子さん」

「あ、ああ。すまない、遅れたようだな」「そんなことはありません。我々もいま到着したばかりです」

啓史の言葉に頷いた幸弘は、妻を促し、啓史の横をすり抜けていった。沙帆子の姿がないことが気にかかっていた啓史は、美美子に声をかけたかったが、話しかけられる雰囲気ではなかつた。

道の向こうに目を向け、沙帆子の姿を探すが、こちらもひどく気になる。

「啓史君のご両親ですね。どうも、沙帆子の父の榎原幸弘です」

「佐原さん、沙帆子の母の美美子と申します。どうぞよろしくお願ひします」

「こちらこそ。啓史の父の宗徳といいます。こつちは妻の久美子です」

「は、はじめてまして。よろしくお願ひします。沙帆子さんみたいなかわいらしい娘さんとあの子が結婚なんて、もう夢のようで……」

「久美子。その話はあとでいいだろう」

舞い上がつたまま、おしゃべりを��けそうな久美子を、宗徳はやさしく制した。

両親達の挨拶が一段落ついたのを見届けた啓史は、幸弘に歩み寄つた。

「幸弘さん、沙帆子さんは？」

幸弘が振り向き、辺りを見回す。

「ああ、徹君と一緒に。すぐやって来るだろ」

その言葉に眉をひそめた啓史は、この場にいるはずの人物がひとり欠けている事実にようやく気付いた。

徹兄！

「迎えに行つてきます」

平静をとりつくろつた啓史だったが、踵^{きびす}を返した途端、自然とレストランに向かって駆け出していた。

『愛の館』の近くに、沙帆子と徹がいた。

なにやら、顔をつき合わせて話し込んでいた様子に、無性^{むじょう}に焦りを感じた。

「沙帆子」

啓史の呼びかけに、沙帆子がこちらを向く。

驚きと、どこかほつとしたような心情が入り混じった表情だ。

この兄は、沙帆子に何を言つたんだ？

「兄貴」

啓史は咎^{とが}めるように呼びかけた。

「内緒話の邪魔しに来たのか？」

冗談めかした風に言つうが、その目は真剣そのものだ。

「いつたい何を……？」

「それは言えないな。なあ、エノチビ」

予想通りの徹の言葉を受け、次に啓史は沙帆子に尋ねる。

「沙帆子、兄貴から何を言われたんだ？」

「そ、それは……その」

「いいから、言え」

「啓史、そりやあ、聞かないほうが……」

「兄貴は黙つてろよ！」

「おー、こわ」

徹の小馬鹿にしたような反応に、苛立ちが増す。だがそれよりも、ふたりが何を話して

ていたのかが気になつてならない。

その言葉に、啓史は一瞬固まつた。

「あちゃー」

手で顔を覆つて叫んだ兄を、啓史は睨みつけた。

「な、なんだそれ？　徹兄、余計なこと……」

「余計なことをしたくなるのが、親兄弟ってもんだ」
その徹の言葉に、これ以上文句が言えなくなる。同時に、なおさら会話の内容が気になってきた。

いつたいどんな余計なことを……徹兄は沙帆子に言つたのだろう？

「テツチン先生」

沙帆子が徹に向き直つて呼びかけた。

「なんだ。エノチビ」

向かい合つた徹と沙帆子の間に、啓史が立ち入ることのできない空気が流れる。苛立ちが募り、啓史は顔をしかめた。

ふたりきりで、なんらかのやりとりをしたことはわかるが、内容のすべてを知りようがないことがもどかしくてならない。

「わたし、佐原先生を傷つけるようなこと、絶対にしません」

ギヨツとした啓史は、「え？」と間の抜けた声を発した。

沙帆子は照れたような笑みを浮かべ、さらに「約束します」と口にした。

あまりのことに呆気にとられていた啓史を置き去りにし、ふたりは歩き出した。

「いったい……」

ふたりの背中を呆然と見つめていた啓史は、ようやく我に返つた。

なんなんだ？

割り切れない苛立ちを持て余しながら、ふたりのあとを追つたが、一步踏み出すたびに、どんどん憤りが膨らんでいく。

くそっ！

曲がり角のところにきて、徹が先に曲がったのを見届けた啓史は、沙帆子の襟首めがけてさつと手を伸ばした。掴んだ襟首を思い切り引つ張る。

「あつ」

小さな悲鳴を上げた沙帆子の口をさつと塞ぐ。

驚いたのか、それとも息が苦しいのか、沙帆子は焦つて抵抗してきた。

徹はふたりに気づかなかつたようで、戻つてこない。充分な間を置いてから、啓史は沙帆子の口から手を離した。

「な、何するんですかあ」

何をするだ？ それはこつちのセリフだ！

「な、な、何を怒つて……」

慌てふためいている沙帆子を、啓史はじろりと睨む。

「怒つてる？ 僕が？」

啓史は真顔で聞き返した。

「お、怒つて……ます、よね？」

「怒つてなんかいない」

即座に答えた啓史は、むかつきを消化するために、沙帆子にいたぶりの手を向けた。が、いたぶるほどに、もどかしさは増すばかりだった。

5 心に固き誓い

「い、いたたた……先生やめてえ」

啓史は沙帆子から手を離し、彼女と向かい合った。

「俺の両親の前では、先生と呼ぶなよ」

むかつきがまだ残っているせいで、ついつい居丈^{いたけ}高^{たか}な物言いになってしまふ。

「え？ ど、どうして？」

「そのほうがいいからだ」

腑^ふに落ちない表情を浮かべている沙帆子を見て、啓史はさらに説明をつけ加えることにした。

「お前が先生と呼べば、そのたびに、俺の両親は、お前は俺の生徒で高二なんだって意

識することになる」

どうやら納得できたようで、沙帆子はこくこくと頷く。

「わかりました」

「まだ納得してないからな。……反対はしないだろうが……気にかかることがあることもあるし……」

胸にあつた気がかりを思わず口にしてしまい、啓史は顔をしかめた。

「ところで、さつき、兄貴のやつは……他にも何か言つたのか？」

「え、えーっと……」

沙帆子は考え込み、啓史の様子を窺う^{うかが}。どうやらまだ何か言われたことがあるらしい。なんとかして口を割らせようと思つていると、沙帆子はためらいがちに呟いた。

「あやふやじやいけないって……」

「あやふや？」

「そういう気持ちじゃ、駄目になるつて。結婚したことがないから、何が言えるわけでもないけど……」

なんとも徹兄らしい言葉だ……

「それで？」

さらに催促すると、沙帆子は動搖したように瞳を揺らす。

この反応……いったい……？ 徹兄のやつ、こいつに何を言つたんだ？

「それで……まあ、あれです」

沙帆子はまるで啓史を警戒しているかのように右に一步移動し、距離を開けた。
絶対に口を割らせてやるぞという意志を込めて、啓史は彼女を見据えた。どうやら逃げられないと悟つたらしく、沙帆子はしぶしぶながら口を開いた。

「傷つけるなつて……」

徹兄の野郎！

考えたくないが、確かにこいつはこの俺を……いつでも不幸のどん底に落とせる。
限界を超えたもどかしさと腹立たしさに、啓史は理不尽だと重々承知のうえで、沙帆子を鋭く睨んだ。

「お、おかしいですよね。そんな忠告……」

啓史の睨みに怯えたように沙帆子は言ったが、その言葉は啓史の神経を逆撫でした。

「おかしい？」

啓史は凄みのある声で問い合わせ返した。

「だ、だつて、わたしが先生を傷つけたりとか……あるわけないし……」

啓史は思わず息を呑んだ。

それって……？

一歩沙帆子に近づいた啓史は、左手で彼女の肩に触れ、真意を確かめるべく顔を覗きこんだ。

「ほんとか？」

「え？ ……な、何がですか？」

沙帆子の返事に啓史は苛立つた。

「決まつてるだろ。いま口にしたことだ」

おどおどとした表情をしつつも、沙帆子は何度も大きく頷く。
肯定と捉えていいようだ。じんわりした嬉しさを手にした啓史は、沙帆子の唇に視線を張りつけた。

今日はノーメイクだが、その唇の可愛らしいふくらみは啓史を甘くそそる。
沙帆子の頭の後ろに手を当てて引き寄せ、啓史は彼女の唇を味わった。

「あ、あらら」

背後からよく知っている声が聞こえ、ハツとした啓史は唇を離して顔を上げた。
母親にキスの現場を見られるとは……

「え。えーっと、の、覗こうと思つたわけじゃ……」

上手い言葉がとっさに出でこず黙つていると、久美子が言い訳するように言う。

「わかるてる。いいよ。別に」

不機嫌そうに言い、照れくささをこまかす。

すると遠慮がちに、久美子はふたりに近づいてきた。

「ね、聞いてくれた？」

その言葉が何を指しているのか、啓史はすぐに気づいた。

今朝、佐原の家に着いて母と顔を合わせた途端、頼まれたことに違いない。
橋の伯父が役に立たず、自分にその役目が回ってきたのだ。その役目とは、沙帆子のスリーサイズを聞くこと。

「聞いてない」

啓史はそつなく答えた。

「先生、そんな言い方したら、お母さんが可哀相そうですよ」

沙帆子から諫められ、啓史は彼女に視線をやった。

こいつ、いま注意したばかりだつてのに……『先生』じゃねえだろ……

それに、俺の母親が何を聞いたがつていてるか、知らねえくせに……

「い、いいのよ。お邪魔しちゃつたのはわたしだし」

「と、とんでもないです」

頬を真っ赤に染めた沙帆子は、慌てて手を振る。

沙帆子の態度を愉快に思いながら、啓史は母に軽く手を上げてみせた。
「あとで聞いとくから。行こう。俺らが遅いから、迎えに来たんだろ？」
「ええ。啓史さん、絶対よ。お願ひね」

「念を押さなくともわかつてる」

「せ……」

素早く振り返った啓史は、沙帆子をぎろりと睨みつける。

ぎょっとした沙帆子は目を白黒させ、「啓史……さん」と訂正した。

その反応がおかしくてならず、啓史は腹の中で笑った。

「なんだ？」

「なんの話かなあつて……」

「あとで話す。それで、母さん、沙帆子の両親は？」

「もちろん、ご挨拶したわ。写真を撮りましたって言われて、ふたりを迎えて来たの」「写真？ またか」

啓史は顔を歪めた。

「両親っての写真なんて、いい記念になるじゃない」

記念になるんだろうが……全員勢ぞろいして写真を撮るなんて、照れくさいくてかなわない。親父も徹兄も、幸弘さんも……俺のように照れくさいとは思わないのだろうか？

「それじゃ、俺ら抜きで撮ればいいだろ」

「何言つてるの。主役のふたりがいなくちゃ」

『主役』という言葉に、いささかうんざりする。

沙帆子を手に入れるためなら、式だってやる。が、やらなくてもいいことはなるべく避けて通りたい。

啓史はため息をつきつつ沙帆子の手首を掴むと、大股でずんずん教会へと向かつた。

「なんか、安心しちゃったわ」

うしろからついてきている母に、啓史は歩きながら振り返った。

「安心?」

「ラブラブなんだもの」

「ラ、ラブラブ?」

「は?」

母親に向^{むか}け、威嚇^{いかく}するように声を上げる。

いまの言語道断な発言は、消せるものなら消し去りたいし、二度と口にしてくれるなと怒鳴りつけてやりたい。

啓史は突き上げてくる衝動を、ぐつと堪^{こら}えた。

この際、ラブラブ発言だらうとなんだろうと、受けて立とうじゃないか。

苛立ちを発散するため、啓史は沙帆子の腕を引っ張るようにして再び歩き出した。

「あつ、來た來た、やつと來たあ」

教会に着いた啓史を、順平が騒々^{そぞぞう}しく迎える。兄の気も知らず、この弟ときたら、テンションマックスではしゃいでいるとは……あー、この天真爛漫^{てんしんらんまん}な笑顔を、思いつきりいたぶつてやりたい。

「う……」

啓史と目を合わせた順平は、その顔から笑みを引っこめた。どうやら、いたぶりたい衝動が顔に出ていたらしい。目を泳がせた順平は、そそくさと父の後ろに隠れた。

「主役のおふたりが来ましたね。さあさあ、みなさん並んでください」

牧師の弟は教会をバックに、皆を並ばせ始めた。

順平と徹の前に両家の夫妻が立つ。啓史は両親たちの様子^{うがた}を窺^くつた。彼らは親しくなれそうだろうか?

良好な関係を築いてくれることはないのだが……あまり仲良くなられては、それはそれで自分にとつて悪い状況を招くかもしれない。

親同士が結託^{けつたく}して、結婚を先延ばしにしろなんて、俺を説得し始めないと限らない。「新郎様、どうなさいました?」